

黒の剣士のマインクラフト 黒の剣士と英雄達

蒼淵の暁

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

YouTubeにて投稿されている黒の剣士のマインクラフトをスピントフした作品です。

あらすじ

マインクラフトを始めた少女霊夢彼女はマインクラフト界には新入りで戦闘が好き少女であるが同時に何か重要な目的があるかのように歩みを進める。その先には一体何があるのだろうか・・・

# 目次

|              |   |
|--------------|---|
| 序章、リンク・スタート  | 1 |
| リアルパート「学園日常」 | 4 |
| サバイバー        | 7 |

## 序章、リンク・スタート

リンクスタート!

そんな掛け声と共に意識は電子の世界へと落ちていく。

肉が裂け骨となり、肉体が電子へと溶け合っていく。

電子の世界で骨が形成され受肉する。概念という存在から電子の存在へと、実在している存在へと変わっていく。

そして・・・意識はそこで目覚める。

序章「リンク・スタート」

目が覚めると。私はそこにいた。電子の世界であり現実と大差ない素晴らしい世界。ここから物語が始まるのだ。

?? 「んー!!!ふああ」

彼女は背伸びをし体を伸ばす伸びた感覚が心地よいのかあくびまですしている。

?? 「さて!ここから始まるのね!私の物語が!!」

彼女の名前は霊夢、新米のクラフターであり剣士でもある。

霊夢「さて!この地に降り立ったからには!まずやる事!それは!」

霊夢は近くにある木に向かう。そして・・・

霊夢「うおおおお!!!」

木を殴り始める。そう、マインクラフトは木を素手で倒す所から始まるのだ。

霊夢「木を切って原木の一つを木材四つにクラフト。そこから作業台を作つて」

慣れた手先でテキパキとこなして行く。剣、ピッケル、斧、シャベルをクラフトする。

霊夢「次に土を掘って・・・」

土を掘り石を探す。ピッケルで石を掘り丸石を確保する。そして

その丸石を先程ツールを作ったようにクラフトする。これで「石ツール」ができるのだ。

霊夢「さてと！拠点を探さないと!!とりあえずは平原でいいかな」

作業台を回収しタツタツタつと走り拠点候補地を探す。お腹が減ってもお構いなし。そこら辺の木に生えてるリングゴやゾンビーフを貪り先を目指す。ついで感覚で羊をしばき羊毛を回収して先を目指す。夜が訪れてもお構いなし。「まだ」大丈夫なのだ。

霊夢「急がないと・・・まだ装備が無いし・・・接敵しても逃げるしか無い・・・」

走る、奔る、疾る。何が彼女をそこまで駆り立てるのか。何かの衝動に駆られるわけでも何故急ぐのかもわからない。ただ、唯一わかるのは「急がなければ」と言う思考、焦りと言った感情だけだ。

朝も昼も夜も走り走り走り続けるそしてそのまた繰り返し、それを5回ほど繰り返して・・・

霊夢「ここなら・・・いいかな。」

たどり着いた平原、敵はいないし平和な大地である。

霊夢「よし・・・拠点を建て・・・やっぱりシエルターを掘るか！」

そう言うと彼女は地面を掘り始める。一心不乱に掘りつづける。木材にはストックがあるのでハシゴを作る分はある。そして・・・

霊夢「あ、岩盤・・・」

彼女は地面を掘り続けて最下層まできた。そしてピッケルで石を掘る。すると・・・

ポココココン

その掘った石を中心に半径二マスずつ掘られる「5×5」マスで掘られて行く。

霊夢「うん！こんなものかな!!」

そして、ある程度広げた空間に作業台を置きかまど、チェスト、ベッド等を置く羊毛を飼っていたおかげですんなりと置けた。

霊夢「ふう・・・RTAでも無いのに急ぎすぎたかなあ・・・けど・・・地上でボコス力撃たれるよりはマシかなあ・・・」

そう、この世界には銃がある。そして、夜にはゲリラや鉄血兵が沸く。まだ初日付近だったため何とかなつたが・・・今後どうなるかはわからない。確実に言えるのは・・・

霊夢「仲間・・・欲しいなあ。具体的にはスナイパーとか支援兵とか色々・・・とりあえず・・・明日学校に行って仲間を探してみようかな・・・うんそうしよう。」

そういうベッドに横になると・・・

霊夢「ゲームからログアウトと・・・」

彼女はゲームからログアウトした。こうして物語は始まりを迎えるのである。

次回、リアルパート「学園日常」

## リアルパート「学園日常」

キーンコーンカーンコーン……キーンコーンカーンコーン  
学園のチャイムが鳴り響く。そのチャイムの音が学園の終わりを  
告げる。

霊夢「終わったー……疲れた……もう」

周りのみんなはどこで集合?とか帰りにカフェに寄ろうぜ!とか  
言いながら帰りの支度をしている。

霊夢「(私もそんな青春送りたいなー……んでも正直そんな私の姿  
が想像できないや……)」

彼女はそう思いながらも帰宅の準備をする。そんな時だった。

???「お! いたいた!!」

金髪の少女が私に向かってくる。手を机につけて私に話しかける。

霊夢「ん?」

???「お前! 博麗霊夢だろ?」

霊夢「そうですけど。何故名前を?」

???「有名だからな! 容姿端麗で博学多才だけどほとんど何も喋らず  
どこに住んでるか何をしているかは不明でミステリアスな要素も持  
ち合わせる。謎の美少女……博麗霊夢!! ってな!」

霊夢「……私いつの間にそんな噂立ってたの? (これはいいカモ……  
いえ、仲間ができるかも♪)」

実は知っていたが知らないふりをして演技をする。

???「意外とこの学園にはいろんな噂があるぞ? 例えば私は才色兼備  
のスナイパーとかな!」

霊夢「そもそも貴女の名前がわからないのだけれど」

???「ああ! 名乗り忘れてたな! 私の名前は霧雨魔理沙! 狙った獲物  
は逃さないぜ!」

霊夢「じゃ、魔理沙ね……ところで……貴女スナイパーって言っ

てたけど狙撃は得意？」

魔理沙「え？おう!!どんな距離の敵も的確に射抜いて見せるぜ!!」

霊夢「なら頼みたい事があるんだけど」

霊夢は軽くニヤツと笑い戸惑う魔理沙をとある店へと連れて行く。

霊夢「おやつさーん!!連れてきたよ!!!」

バン!と扉を開けカウンターに立つおじさんに声をかける。

???'「お、啖呵切つてから早かったな!記録更新だ。おめでとう。」

霊夢「うれしく無いわよ!それ!あ、魔理沙紹介するわね。この人はダン。この喫茶店「ストレンクス・ハーツ」を経営してるイケオジよ。」

ダン「おいおい、イケオジとかいうなよ。俺はどっちかというとおじさんだ。」

※ダンのイメージとしましては某金属の歯車の裸蛇みたいな感じ  
です。

霊夢「そうは言っても誰が何というイケオジだと思うけどね。」

魔理沙「・・・あの、霊夢。一体何が目的なんだ・・・?もしかして(自主規制)とか(自主規制)とかさせる気か!」

ダン「俺の店と俺そんなふうに見られてんの?」

霊夢「魔理沙そんなわけないでしょ?いい?今から貴女にはマインクラフトっていうフルダイブゲームをやってもらおう!」

魔理沙「フルダイブ?ちょっと前事件になってたソードアート・オンラインみたいなのか?危険だつて!」

霊夢「今は大丈夫よ。突如ネットに配布されたザ・シードのお陰で安心安全なフルダイブゲームは増えてきたのよ。マインクラフトもその一つ。元々マインクラフトはPCとか家庭用ゲーム機が主流だったんだけどザ・シードのおかげでフルダイブ化できたみたいね。拡張性をそのままにフルダイブ化されたから色々できるのよ♪それで、仲間が必要でね・・・それで丁度いい所に魔理沙が来たってわけ!」

魔理沙「うー・・・まあ、気になってないわけじゃないけど・・・」

霊夢「進めば未来止まれば後悔」

魔理沙「うん？」

ダン「気にすんな。またどつかのアニメの影響受けたんだろ。しかもそれ逃げたら一つ、進めば二つだからな？」

霊夢「細かい事はいいのよ。さ！準備しましよ！」

「素晴らしい霊夢は喫茶店の二階へと足早に上がっていった。

魔理沙「霊夢って・・・ミステリアスっ子だと思ってたけど意外と押しが強いし何というかイメージが崩れたな」

ダン「噂によるイメージってのは大抵そんなもんだ。ブラフ、ハツタリ、ネゴシエーションとはよく言ったもんだ。あいつ、あー見えて1人目はお前さんにターゲット絞ってたのかもな。」

魔理沙「え？」

ダン「霊夢から聞いたが、お前さん学園ではスナイパーって呼ばれてるらしいな。お前さんの狙撃の腕前確かめさせてくれよ。2回に設備があるから行ってこい。詳しいルールは霊夢から聞け。俺はナビゲーションの準備をする」

「素晴らしいカウンターの床のハッチらしきものを開け地下へと入っていった。」

魔理沙「うんむう・・・まあ行けばわかるか。(進めば未来止まれば後悔か・・・)」

「素晴らしい魔理沙も二階へと上がっていった。」

「順調に動き始めた歯車しかし、その歯車は何かを挟み込み狂っていく。」

次回、サバイバー

## サバイバー

霊夢と魔理沙がプレイを始める数日前・・・

カランカラン

和人「エギルさん、来たぜー」

明日菜「こんにちはー!」

アンドリユー「お!来たなお前ら!」

ここはダイシーカフェ。彼らサバイバーの憩いの場である。

里香「おつそーい!!どれだけ待てせるのよ!!」

和人「はははっ、すまんな。」

詩乃「まあ、英雄は遅れてやってくるものよ。」

和人「よしてくれよ・・・あれ?響呀と紅葉の2人が見えないが・・・」

その時フォンフォンと地面からホログラムが出てくる

響呀『いるぞ。ちよいと用事があってホログラムだけどな。』

和人「相変わらず技術力が数世紀先をいつてるよなあ・・・ホログラムなんて」

響呀『はっはっは、これを共有するつもりはないぞー?これで金稼ぎしたくないからな』

和人「まあ、そんなもんか・・・それで、俺たちが呼ばれたのはどんな理由なんだ?」

響呀『ああ、実は知り合いにダンっていう奴がいてな。マインクラフトって言うフルダイブ型サンドボックスサバイバルゲームのサーバーを管理しててな。テスト的に入って欲しいんだと。』

和人「マインクラフト?初耳だな・・・」

響呀「そりやお前さん。ゲームに関しては何にしか興味ねえもんな。サバイバルをしてる姿が思いつかん』

和人「いや、流石に剣のために鉄掘ったりとか木材切ったりしてたぞ」

響呀『んじや聞くがピツケルで人工洞窟掘ったりシャベルを持って山を全て削り真っ平らに整地したか?』

和人「・・・流石にしてないな」

響呀『だろ?釣りとかはしてたが今回やるのはある意味違う。元々PCや家庭用ゲーム機で展開されてたゲームがザ・シードでフルダイブVR化したんだ。んで、ガチもんでサバイバルしてきたサバイバーの方々にテストプレイをして欲しいんだと。一応、ダンの客で1人ほどやってるやつがいるらしいが・・・どーも初心者らしくてな。フルダイブをまともにやった事がないらしい。ただ、マインクラフト自体PC版でプレイはしてたそうだ。知識はあるらしい。そこで、君達の出番って訳だ。』

和人「すまん、色々ごちゃつとしてて話が見えない」

響呀『・・・確かに、今の説明じゃわかりずらいわな。OK。詰まる所テストプレイヤーになって欲しいんだ。全員分のソフトは買っている。問題は・・・みんなの意思を確認したい。予め言っておくが死んでもいい世界だ。GGOやALOと同じだ、デスペナらしいデスペナは無いし基本的にはオープンなワールドじゃ無いコードを知るものだけが参加できる。つまりPvPも起きにくい、サバイバーにとつちやぬる過ぎるかもしれないがどうする?』

和人「一つ聞くがマインクラフトって言うのはどんなのなんだ?環境とか」

響呀『んー、1から話す必要があるか。マインクラフトってのは元々据え置き型やPC等で発売されてた旧世代のゲームだ。サンドボックス型で基本的にやワールド作って入ると防具や武器が無い状態で放り出される。そこからサバイバルしてくって感じた。だがP

C版だけしかできないが面白いことができな本体だけの状態を「バニラ」というんだがそこから一部のプレイヤーがMODを追加することにより要素を付与できる。そうだな、美味しいスポンジケーキにトッピングをしていくと考えてくれ。そんな感じで自分だけのMOD構成が作れるんだ。んで、今回の環境は銃器や食事が増えたり敵の追加、刀や建築物の追加とか色々入ってる。魔法は・・・無いけどな。ちなみにだがそのPC版にも二種類ある。MODに対応したJAV A版他筐体とのプレイを前提に考えられた統合版だ。基本的にやMODを入れてる人達はJAV A版だな。」

和人「つまり・・・内容的にや鍋か？」

響呀『その通り、どちらかというど闇鍋に近いが（小声）』

と小声で響呀はボソツと言う。それを和人は聞き直した。

和人「さて今なんて言った？」

響呀『何でも無い。んで、みんなの意思を確認したい。どーする？やるかやらないか』

ごまかし話題を少しずらす・・・和人はうん？といった感じで顔を傾げる。

里香「聞きたいけど剣とか鉱石とかってあるの？」

響呀「もちろん。弓だつてあるし銃だつてある。SAOで鍛冶屋をやつてた里香さんには丁度いいかもな？」

と、ちよつと昔を思い出させつつ判断を仰ぐ

里香「んー・・・」

が、微妙だつたみたいだ。

響呀『ちなみに、和人君には朗報だが』

ここで和人に話題を振り

和人「ん？」

響呀『SAOやGGO、ALOでは戦えないようなボスが出てくるぞ』

と、戦闘に関する話題を振る。

和人「何だつて!?! 本当か!!」

それに食い付くのは当たり前かのような反応だった。なぜなら殺り合うことが楽しくて楽しくて仕方ない頭のネジが数本ぶっ飛びかけている黒い戦闘狂には必然だったのだ。

明日菜「和人君!？」

と、料理する事が楽しくて楽しくて仕方ない和人くんに一途な閃光の正妻さんは驚きを隠せないようだ。

響呀『明日菜さんにも朗報だな。いろんな飯が作れる。材料含めて千種類以上だ。』

明日菜「ええ!?! S A O 以上に種類あるの!？」

と、またもやこちらも必然的な反応まさしく料理する事が楽しくて楽しくて仕方ない和人くんに一途な閃光の正妻さんであった。

響呀『ちなみに、俺も行くつもりでいる。ちなみに「小竜」もいるぞ』

この発言に反応を示させるかの様にチラッと「少女」を見つつ発言する。

桂子「え!じゃあ!」

その反応は当たり前前だった。「小竜」と言われて尚且つチラっと見られて察しが付かない程軟い絆では無い

響呀『そう言う事だ。ダンに頼んで付与もできる』

詩乃「私は・・・」

と、自分は遠慮しようかなあと言うことを発言しようとしたのか、それを遮るかの様に響呀は言う

響呀『G G O で体験できない狙撃ができるぞ。弾道予測線も無い・・・ヘカートはないがレールガンがある。』

詩乃「あ、やるわ。”相棒”にも今確認とるわ。」

素晴らしい詩乃は携帯を取り出し「相棒」に連絡を取る。

響呀『とりあえずは、この場にいる全員やるって事でOKか?』

和人「そうだな。スグにも確認しないと・・・」

響呀『頼む。彼女は抜刀剣にバツチり合いそうだしな。．．．あとは悠木か。紅葉そっちどうだ』

響呀が出てきたようにホログラムで紅葉も出てくる。

紅葉『今確認とってる』

※この世界での紺野悠木は病気が奇跡的に回復し少し歩けるようにまで回復している。また、響呀と紅葉それぞれの活躍により原作ソードアード・オンラインで死亡した一部のキャラが生存している。

紅葉『やるってよー!』

響呀『よし来た!!後は．．．あいつらか。紅葉連絡は取れないのか?』

紅葉『ダメね。あの子達人生謳歌しすぎよ．．．世界各国回ってるのよ?連絡つかないわよ．．．』

響呀『ま．．．SAOで新婚生活が台無しになってるもんな．．．まあいいだろうよ。』

和人『?』

響呀『んじやとりあえずこれで全員．．．じゃない。和人、琴音とプレミアあたりにも確認とってくれ。それと詩乃そっちはどうだ?』

詩乃『即OK送ってくれたわ。むしろついていくって』

響呀『了解した。．．．よし!俺はダンに確認取ってくる。』

和人『ああ、わかった。』

響呀『んじやまた後で連絡する』

ポポンと音を立ててホログラムが消える。

紅葉『響呀、嬉しそうだったな。』

和人『確かにな．．．SAOの頃は何かに取り憑かれて狂ったように戦ってたからな．．．よかったよ。』

紅葉『そうね．．．それじゃ私も落ちるわね。また今度』

ポポンと音を立ててこちらもホログラムが消える。

和人「これで今回の用事は終わり・・・か？」

桂子「あ！響呀さんに慧疾がやるかどうかを聞きそびれました!!」

紅葉『あー・・・忘れてた。合流したら伝えておくよ。それと・・・

桂子ちゃん!』

桂子「えあ！はい!!」

紅葉『彼は落とせた?』

桂子「ふえ!!?」

里香「ちよ、紅葉・・・流石にそれはく」

紅葉『里香・・・貴女もよ・・・』

里香「なつ、なんのことかなあゝ(震え声)」

里香は声を若干振るわせ目を泳がせる・・・完全に困っている。

和人「なあ紅葉流石に・・・」

紅葉『うーん・・・私からしたら和人、貴方もなんだよねえ・・・』

和人「え!?!流石に俺は」

紅葉「アーちゃんとかどこまで進んだのよ。」

明日菜「ええ!?!?そ、それはあ／＼／＼」

和人「紅葉・・・お前つて・・・」

と、そんな時だった。

紅葉『あいつたあああ!?!?』

紅葉のホログラムの後頭部に突然チョップが入る。

響呀『お前何やってんだ：：???人の恋愛事情に首を突っ込むな：：』

と、響呀の声が聞こえてくる。ホログラムにはその姿は映らずとも声が聞こえてくる。

響呀『いやー、すまねえな。うちの紅葉が・・・おわびに今度銀座のケーキ奢るわ・・・』

桂子「いえ、流石に・・・」

響呀『んまあ何かしら詫びはさせてくれ・・・』

里香「ふふん、奢りならどれだけ食べてもいいのよね?なら食べま

くるわよ。」

響呀『ははっ、まあものによるがな』

桂子「あ！そうだ！慧疾さんはやるんですか？」

響呀『ああ、そのはずだが：桂子、慧疾の連絡先持ってるんじゃないのか？』

桂子「えっと、スマホを忘れちゃって・・・」

響呀『そうだったか・・・（この際あれ渡しとくか・・・？いやでもまだ検証できてないしな・・・）よし、念の為聞いておく』

桂子「お願いします！」

響呀『んじやこれで解散かな・・・何か用があったら連絡するわ。じや、お疲れ様、紅葉そうしよげるなあとで』

そう言いながらホログラムは消える

その場に絶妙な空気と間ができる・・・その雰囲気はどうにかしなければと和人は話を始める。

和人「・・・まあ、とりあえず・・・せっかく集まった事だし・・・何かしらやりに行くか？ゲーセンとか、それこそ銃撃つ練習に射撃場とか」

詩乃「いいわねそれ。せっかくだし相棒と合流して色々話したいし

♪」

桂子「あっ、なら私も合流したいです！」

和人「よし！なら出発だな！エギルさんこれお会計！」

アンドリユー「あいよ！楽しんでこい！」

和人「ああ!!」

そういい彼らはダイシーカフェから出発した。これが、新たななる物語の始まりである。